オープンカレッジ

農村移住の現場に学ぶ

移住支援 仲介者の役割

名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授
林　琢也

現在、多くの自治体が移住促進を掲げ、さまざまな補助や助成を通じ、転入のインセンティブを高める努力を続けている。それは人材獲得に向けた消耗戦の様相を呈している。

地域振興のために移住を促すという文脈には、多くの問題が内包されている。行政が特定の事業や活動を手厚く支援することで、それが望ましい移住の形であると評価を固定化してしまう可能性もある。本来はさまざまな目的や思いを抱いて、転入した移住者を、役で移住した場合、人口再生産の役割を期待する雰囲気や発言によって、住民との交流を躊躇（ためら）い、孤立感や疎外感を助長してしまうこともある。受入側の視点に立てば、担い手も減り、地域の経済や社会を維持する余裕もない中で、ある程度の選別や期待をかけることは、当然と思う住民や行政関係者もいるだろう。ここに政策的に農村移住を進める際の構造的な問題が見て取れる。

こうした課題を緩和する方法はないのか。私は新旧住民の間に立ち、移住支援を行う仲介者に注目した研究を進めてきた。仲介者の行動には、属人化された暗黙知も多く、そうした知見を、聞き取りや観察調査を基に可視化することに努めている。岐阜県郡上市和良町の実践を扱った、林（2023）では、仲介者に必要な姿勢や態度を4点に整理した。

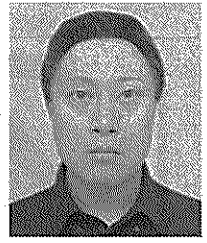
1点目は、移住者に寄り添う姿勢と関係構築への配慮である。移住者と向き合い、その人の意向を自分の物差しではなく、新たな学びや発見として肯定的に捉え、必要な人脈を紹介することの意義である。

2点目は、移住者の成長や自己実現を支える、伴走型支援の重要性である。仲介者が移住者の活動や事業を応援・宣伝する中で、周囲の協力が促され、実現のスピードが増したり、障壁が低くなったりすることも多い。さらに、住民の利他的な行動に触れる中で、農村における相互扶助の精神が、移住者に自然な形で浸透していく面もある。

3点目は、毅然とした態度と感覚の相対化である。これは移住者の言動や行動が気になる時に、言うべきことはきちんと伝える、心の強さである。ただし、自分の考えを絶対視せず、俯瞰（ふかん）できる冷静な判断力を併せもつことが必要となる。

4点目は、移住（者）に対する住民の固定観念の払拭や調整である。移住者への否定的なまなざしに対し、地元の住民でもマナーやルールを守れない人や、人付き合いの苦手な人もいることを引き合いに出し、1人の生活者として、公平な目線で暮らしを語る仲介者の姿は、移住者には心強く、住民には偏見や先入観を見直す機会を提供している。

多様な人の暮らしや生き方を尊重し、時に刺激を与え合い、共に地域を支える存在になっていくことは極めて重要である。そのためには個別事象の丹念な調査と分析が、現場の実践や活動を支える理論の構築につながると信じ、現場へ通っている。



はやし・たくや　専門は経済地理学（農村地理学）、農業経営論、地域づくり論。筑波大学大学院博士課程生命環境科学研究科修了、博士（理学）。1980年生まれ。